東方幻夢想

邊瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方幻夢想

【Ｎコード】
Ｎ３９３８Ｌ

【作者名】
邊瑠

【あらすじ】
読書と平穏と静寂を好む少年は、戦闘能力が高いわけでもないのに、能力だけチート。高いカリスマ性を持つ少年と、そんな少年を愛する少女達の物語。
※注意※　ハーレムです。「のんびりほのぼのイチャイチャラブラブときどき戦闘」がモットーです。

プロローグ

人間も妖怪も幽霊も神も閻魔も存在する秘境、幻想郷。
そんな幻想郷に、『愛された』という理由で連れて来られた少年が、
静かに朝を迎えた。

チュンチュンという雀の鳴き声を聞きながら、ガラリと戸を開ける。
そして、もはや日課となってしまったソレを呟く。

「おはよう、幻想郷」

今日も今日とて平和だね――
ボンヤリと、少し朝日を眺めて踵を返す。

これは
何故か『愛されやすい』体質の、能力だけチートな少年と
少年を心から愛する少女達の物語

プロローグ（後書き）

ハイ、凶行に及びました。
ごめんなさい。

東方大好きなんです。
ウチの子とイチャラブさせたかったんです。

この小説は「のんびりほのぼのイチャイチャラブラブときどき戦闘」がモットーです。
ハーレム系で能力がチートです。
この時点でアウトな気がします。でも、やめません。
だって、イチャラブして欲しいんですもん……。

更新は時々です。
メインももう一つの方なんで。

主人公設定

名前　真神　ベル　（まなかみ　べる）

年齢　１８歳

性別　男

種族　人間

能力　事実を捻じ曲げる程度の能力

危険度　極低

人間友好度　極高

主な活動場所　人里

二つ名　幻想郷に愛されし者

容姿　金髪茶眼。腰まで届く長髪。日英のハーフなので、日本と英国の特徴を受け継いでいる。
　容姿は整っている。周囲の反応のおかげで自覚あり。
　本人曰く「人形みたいだよね。……無機質感とか」

身長　巫女さん曰く「弾幕勝負をした誰よりも高いわね」

体重　女医さん曰く「まぁ、この身長なら妥当でしょう」

性格　わりと大人しい。読書と平穏と静寂を好む。表情が希薄。
すこし変わった発想をすることが多い。
別種族に対する好奇心が旺盛で、初めて会った安全そうな種族とは積極的に仲良くする。
子供好き（純粋な意味で）。

備考　何故か愛されやすい。『愛された』ため、スキマさんによって幻想入り。
幻想入りの後、幻想郷の気に当てられたのか能力が覚醒。本人もスキマさんもビックリ。
カリスマ性が高く、人を惹き付ける何かを持っている。
動物にも有効らしくボンヤリしていると動物が寄ってくる。
戦闘はできるが、得意というわけではない。
そのため、死なないための努力を行う。
庭師さんと門番さん曰く「『けん』の才能はある」

能力　チート。
名前のまんま。事実を捻じ曲げる。
しかも、汎用性が高い。超厄介。
本人曰く「これ、セコイよね」

主人公設定（後書き）

能力はチートです。
戦闘はできるけど、得意ではない。
つまりド素人。
だから死なないために努力する。みたいな。

戦闘はテクニカルタイプ。
つまりこう。

魔理沙「弾幕はパワーだぜ」
アリス「弾幕はブレインよ」
ベル「弾幕はテクニックだ」

博麗神社・博麗の巫女（前書き）

う～ん。

霊夢さんのキャラが崩壊している気が……。

博麗神社・博麗の巫女

幻想郷で最も重要なモノである『博麗大結界』。
ソレを管理する『博麗』が代々住まう神社の縁側に、一人の少年と一人の少女が煎餅を齧りながらお茶を啜って座っていた。
何故か、袖の肩から二の腕の部分がない巫女服を着ている今代の『博麗』――博麗　霊夢と、
幻想郷に愛された少年――真神　ベルである。

「人里での生活はどうなの？」

「ん？　ん～……まぁ、問題ないよ」

ぽりぽりと煎餅を齧りながら問う霊夢に、ベルは日光の暖かさで極僅かに眼を細めながら答えた。

「里の人達はよくしてくれるし。慧音さんと妹紅は『困ったら頼れ』って言ってくれたし」

「幻想郷に来て二週間。人里に住んで一週間しか経ってないのに、随分と人気者ね」

「幻想郷だからじゃないかな？」

「じゃないわね」

「ふぅ～ん……」

長年付き添ってきた夫婦であるかのようにトントン拍子で会話が進む。
もっとも、彼の場合は誰が相手であろうとこうなってしまうのだが……。

「で、今後の予定みたいなのはあるの？」

「ん。とりあえず、紅魔館に行ってみたいかな。図書館が気になる」

「紅魔館、ねぇ～。……襲われないでよ」

「襲われても問題ないのだけれどもね」

軽く眼を細めて少し心配気にする霊夢に対し、ベルは相変わらず希薄な表情で肩を竦める。
正直言って、この能力チート少年にとってはそんな前提すら意味がないのだ。

「能力でどうとでもできるからね」

「セコいわね」

「セコいよ。チートだもの」

貶されても平然としているベルに少々呆れてしまう。
この少年の能力がチートであることは理解している。
というか『幻想郷に愛された』という時点でチートなのだ。
心配するだけ無駄だったかもしれない、と軽く頭を振った。

「ハァ～……。まぁ、いいけど。とりあえず、これを渡しておくわ」

どこから取り出したのか、霊夢の手には数枚のカードがあった。
弾幕勝負で使用する、スペルカードの素となるカードだ。
いま霊夢が持っているカードは白紙であるが、『スペル』を閉じ込めてしまえば綺麗な絵が浮かんできたりする。

「アレ以外は渡してなかったからね」

「僕としてはコレすらも無意味なんだけど」

「いいから。持っておいて損は無いでしょ？」

「まぁ、そうだね。損は無い。保険として持っておこうか」

死にたくないし、そう呟いてカードを受け取り、ポケットへ収納した。

「コツは、強くイメージすることよ。イメージが弱いと、完全に出

来たとしても効果が薄いわ」

「ん、了解」

「……なんでこんな奴、好きになっちゃったのかしら」

自身の生死が関わるというのに、かなり適当なベルを見てポツリと呟く。
ソレを聞き取ったベルは首を傾げながら言った。

「恋はロジックじゃない、なんてことは小説でもよく言うよね」

「そういうものなの？」

「さぁね。そんなことを聞かれても答えようがないよ。僕自身が恋愛について悩んだことがないから」

「女には苦労しなかった、ってことかしら？」

「恋愛に苦労しなかったんだよ。恋をしたことがないからね」

その顔でこのカリスマ性を持って、何てことを言うか。
というのが正直な感想だが、やはり『女』を知らないということに安心する。
それと同時に、会って二週間しか経っていないこの少年に、そこまで好意を寄せている自分に対して呆れが生まれた。
それでも「ああ、まぁそんなもんか」となんとなく納得している自

分がいることも事実だったりして……。
結局は自分が真神　ベルに恋心を抱いていることを認め、納得しているのだ。

「まぁ、アイツもそうなんでしょうけど……」

「なにが？　っというか、アイツって？」

「紫よ。もう一つの質問は答える必要はないでしょう」

「紫さん、ねぇ～」

正直、ベルは恋や愛といったモノに興味がない。
何かの糧になるわけでもなく、役に立つというわけでもない。
というか、思考が捕らわれる原因になりそうだから必要ない、というのがベルの考えだ。
恋だの愛だので悩むぐらいなら数式でも解いとけ、と思ったり思わなかったり。
まぁ、流石にそこまで酷い考えは持っていないが、とにかく恋愛については理解できていない。
「何故、恋なんてしてるの？」と友人に何度も聞いたことがあるくらいだ。
その友人からも恋愛についてイロイロ語られたが、さっぱりわからなかった。

「とにかく、僕は紅魔館に行きたい。具体的には図書館に行きたい」

「ん～。別に構わないけど、怪我はしないでね？」

「しないよ。痛いの嫌だからね。そもそも……」

言葉を区切って霊夢を見つめる。
突然気力が宿った瞳で見つめられ、霊夢は顔を赤らめる。

「僕のことが好きだと言う女の子がいるんだ。怪我をして悲しませるようなことはしないよ」

「う……あ……はうぅ……」

ボンッ！　と煙が出たのは幻覚だ、きっと。
顔を真っ赤にした霊夢は、それでも頭を振って気丈に持ち堪える。
かなり危なかったです……。

「そ、そう言ってもらえるのは嬉しいけど。あんたは一つ勘違いをしてるわ」

「勘違い？　さっき『好き』って言ってたし、前も聞いたから問題ないと思ったけど。気が変わった？」

「ええ、変わったわ。いま気が付いた」

「そうなんだ」

コクリと赤い顔を縦に揺らすのを見て、とくに何の感慨も無く頷く。
まぁ、好意が消え失せたとしても特に気にしない。気にする必要性が無い。
だから今までのように普通に接するだけなのだが……。
やはり、付き合いを控えた方がいいのだろうか？
そう尋ねようとした時、

「んっ……むぅ……」

「……？」

口を塞がれた。
しかも『唇で』というベタなやり方で。
突然のことに驚き、パチクリと瞬きをする。
赤い顔のままで口付けをし、さらに顔を赤くして唇を離す。
ベルの腕にしがみついて、肩に頭を預けた。

「嫌いになった、って意味じゃないわ。もっと好きになった、って意味」

「……よく、わからない」

「もうっ！　察してよ、恥ずかしいんだからっ！」

赤い顔で怒鳴られても困る。

そもそも『好き』がよくわかっていないのに、もっと好きになったと言われてわかる筈が無い。
首を傾げていると、霊夢はボソボソと呟いた。

「す、好きなんじゃなくって……」

「なくって？」

「そ、その……あの……」

あーうー、と唸る霊夢からの返答を静かに待つ。

「『好き』じゃなくて、その……」

「うん」

「あ、『愛してる』」

顔を真っ赤にして、潤んだ瞳で上眼遣いをしてオズオズと答えた。
なるほど、とベルは納得する。
彼的には『好き』も『愛してる』も同位に存在するのだが。
前者よりも後者の方が、なんとなく強い愛情を感じるのは確かだった。

「そう。……ありがとう」

「ど、どういたしまして」

うぅ〜、とベルの肩に顔を押し付ける。
さすがに、もう耐え切れなかったらしい。
そんな彼女の頭を撫でながら、

（もう少ししたら恋愛について理解できるかもしれないな）

と、漠然と思った。
コレだけ好かれているのだ。理解できなければ失礼だろう。

そんなことをしていると、そろそろ妖怪が活発化する時間帯になってきた。
もちろんベルは、死にたくないので帰るつもりだ。

「霊夢。そろそろ時間だし、もう帰るよ」

「え？　もう帰るの？」

「うん。妖怪に襲われたくないし」

「あ、うん。そうね」

そう言いながらも、袖を離さないのは恋する乙女というところだろ

うか？
それはそれで可愛らしいとは思うが、帰らせてくれなければ困る。
幻想郷に来て二、三日程度のときは良かったが、自分が『男』として見られているのならば泊まるわけにはいかない。
この娘も緊張するだろうし。
悩むベルは、突如名案を思いつく。
とりあえずソレを実行する事にした。

「ねぇ、霊夢」

「ん、何？」

頬に手を添え、軽く口付け。
小説で覚えた偏った知識だが、今の霊夢には効果抜群だった。
顔を真っ赤にして眼を見開き、硬直した。
唇を離し、緩く微笑む。

「おやすみ、霊夢。また明日」

コクコクと頷く霊夢の頭をもう一度撫で、空へと飛び立つ。
目的地はもちろん、自宅だ。

数分後。

山菜を取引材料に、夕食を食べに来た黒白の普通の魔法使いによって顔を真っ赤にし、頭から煙を噴き出して硬直している巫女が目撃された。

博麗神社・博麗の巫女（後書き）

テーマ的には『デレデ霊夢さん』です。
かなりキャラ崩壊してますが、この小説のモットーは『のんびりほのぼのイチャイチャラブラブときどき戦闘』なので気にしません。
ちなみに、ウチの霊夢さんは貧乏ではないです。裕福というわけでありませんが……。
一般家庭の財源程度なので、お金に拘っていることはありません。

個人的に、東方で一番のお金持ちは『永遠亭の女医さん』だと思ってます。
医師だし、薬剤師だし、儲かるんじゃないかなぁ～と。
皆様は誰が一番お金持ちだと思っていますか？

人里・紅魔の従者（前書き）

すみません、更新に間が空きました。
試験勉強とか試験とか、そのあとの精神的疲労とかでキツかったんです。
得意科目の点が低くてプライドが傷ついたし。
しかも追い討ちをかけるかのように、隣、後ろ、右斜め前の野郎どもが１００点取ってやがるし……。
まぁ、愚痴を言っても仕方が無いです。
どうぞ、駄文を御覧ください。

人里・紅魔の従者

人里では『博麗』やら『八雲』やらの力が働いているらしく、人間と妖怪の間で協定（というか契約）が結ばれている。
曰く、「人里に入った妖怪は人を襲ってはならない」。
他にもイロイロあるが、今は関係無いので割愛する。
コレを破った妖怪はとてつもなく可哀想なことになるらしい。
なんでも、「『輪廻転生』から外されて苦しみ続ける」とかなんとか。
この罰が重いのか軽いのかはわからないが、それだけ重要なものだということが理解できる。
そしてこの協定、逆を言ってしまえば「人を襲わないなら入ってＯＫです」ということだ。
周囲を見渡してみれば、魚屋で値切りを行っている羽の生えた妖怪とか、団子屋でおっさんと談笑している爪が異様に長い妖怪とかがチラホラと見える。
成人っぽい妖怪がいるのだから、子供っぽい妖怪がいてもおかしくはない。
実際、人の子と妖の子がワイワイ仲良く遊んでいたり、なんか桃色フィールド展開中の思春期っぽい人と妖がいたりする。
ということは、自分の足元に「おに～ちゃん、おに～ちゃん」と餌をねだる雛にごとくワラワラと集まって遊びをせがんでくる子供の集団の中に、角が生えていたり三つ目だったりする子が混ざっていてもおかしくないわけで……。
長々と回想したベルであるが、結局は何が言いたいのかというと、

「今日も今日とて平和だね、幻想郷」

直後に吹くそよ風は偶然か、それとも幻想郷が彼に答えたのか。

ベルは足元に子供の集団を引き連れ、外の世界の英雄譚（ヒロイックサーガ）を聞かせながら目的の野菜を手に入れるために八百屋へ向かう。

「やぁ、主人。今日は何か良いモノはあるかな？」

「お、いらっしゃい真神君。相変わらず人気者だねぇ」

ベルにくっついてきた子供の集団をみて、八百屋の店主は苦笑する。

「っと、良いモノだったね。ちょうどいい日に来たよ。今朝、トマトとキュウリを仕入れてね」

並べてあったトマトとキュウリを手に取り、ベルに渡した。

「河城のお嬢ちゃんのところから仕入れたんだ。ちょっと値は張るけど、味と質は保障するよ」

「主人が言うのなら、そうなんだろうね。ではソレを貰おうかな」

「はい、まいど」

何やら聞き慣れない名前が出てきたが、興味無いのでスルー。
お金と引き換えに品物を受け取る。
ちなみに、お金はどっかのスキマ妖怪さんがゴッソリ持ってきた。
どこから持ってきたのか聞いても妖艶に笑うだけなので、気にしないことにした。
だって面倒事に巻き込まれるの嫌だもん。

「あ、そういえば」

「ん、なにか？」

「いや、真神君。『紅魔の館』に行きたいんだよね？」

「正確には図書館だけれどね」

「俺達としては、危ないところに行かないで欲しいんだけど……」

『紅魔の館』と聞いた瞬間、ベルの足にしがみ付いた女の子にチラリと視線をやりながら呟く。
足にしがみ付いた女の子の頭を撫でながら、ベルは記憶を探り出した。
霊夢や紫の話を聞く限りでは、そんなに危険な人物はいないらしい。
しかし、それはあくまで『強者』の意見。『弱者』である普通の人間からすれば、恐ろしい存在なのだろう。

……こう言ってしまえば、「自分は普通の人間ではない」と言っているように思える。
いや、実際そうなのだから文句は無いが。

「さっき、紅魔の従者がこの辺りで買い物をしてたよ。話をしてみたらどうかな？」

「紅魔の従者……」

コレも話は聞いている。
紅魔館の主人である吸血鬼の従者。
銀髪でメイド服を着た『時間を操る程度の能力』を持つ、ナイフ使いの少女。
名は十六夜　咲夜。二つ名は『完全で瀟洒な従者』。
「時間を操っておいて程度なのか？」と思わないでもないが、自分がソレを言ってしまえばどうしようもないので気にしない。
情報をくれた店主に礼を言い、子供達と戯れて別れた後、『紅魔の従者』の捜索を開始した。

……数分も掛からなかった。
やはり、銀髪＋メイド服はかなりわかりやすい。
とりあえず、接触のキッカケを探すために少し距離を開けて観察する。
……無駄にスカート丈が短いのは動きやすさを重視しているからか、単に色気づいているからか。
霊夢や紫の話からすると、後者の可能性は有り得ないが。
くだらないことを考えながら彼女を観察していると、ふらついていることがわかった。

おそらく、購入した商品が入っていると思われる両手に抱えた袋が重いのだろう。
ああ、なんてタイミングのいいことでしょうか。
しかも、名高いあの『従者』がふらついているなんて……。

「……ご都合主義万歳。ＧＪ（グッジョブ）幻想郷」

ポツリと呟いた後、お手伝いという名目で『紅魔の従者』と接触をするために、少女のもとへと歩き出した。
しかし、不安に思うことが一つある。
警戒のレベルについてだ。
初対面でいきなり声をかけるのだから、警戒されない、ということはまずありえないだろう。
ということは、警戒してくることを前提として考えなければならない。
警戒のレベルが弱ければ問題ないが、強かった場合は話を聞いてくれない可能性もある。
さてはてどうしようか？　などと考えながら、歩み寄る。
気配でも感じたのか、少女はクルリと振り返りベルを見据えた。

「何か御用で？」

「突然失礼、お嬢（レディー）さん」

軽く頭を下げ、挨拶の代わりとする。

「その荷物を一人で運ぶのは無理があると思うよ。信用できないかもしれないけれど、手伝いでもどうかと思ってね」

「手伝いって、貴方も荷物を……あら？　さっきまであった気が」

「見間違いじゃないかな。それはともかく、手伝いの件なんだけど」

普通なら断る。ベルは、自分で言いながらもそう思った。
今の世の中は腐っている。政治家や警察、軍人。そういった者達ですら犯罪を行う世の中だ。
自分なら絶対に断る。

「そうね、それならお願いするわ」

「……」

幻想郷は格が違うのかもしれない。
『強者』だからだろうか？
いや、『幻想郷』が『真神　ベル』のために用意した布石かもしれないが。
差し出される荷物を受け取りながら、ベルは呟いた。

「ＧＪ（グッジョブ）幻想郷。マジでＧＪ（グッジョブ）」

ご都合主義、万歳。
いやいや、こんな事を考えている場合ではなかった。
せっかくの図書館へ行く交渉を行うチャンスなのだ。逃してはならない。

「とりあえず自己紹介でも。僕は　真神　ベル。『ただの』人間だよ」

「私は　十六夜　咲夜。通称『紅魔の従者』。人間離れした人間よ」

「よろしく、十六夜さん。ところで、目的地はどこかな？」

「奇妙なことを聞くのね、貴方。この私がめざす場所なんて、一つしかないでしょう？」

「なるほど。じゃあ、貴方は二週間前に幻想郷に来たばかりなのね？」

「そういうこと。だから此処の常識なんて少ししか知らないし、『常識』だから教えてくれる人も少ない」

道中、「何故『紅魔の従者』である私に声をかけたの？」という質問をされたため、素直に『神隠し』に遭ったことを話した。
危険であるという認識が強い紅魔館の重要人物の一人である自分に

声をかけたことに、疑問を抱いたらしい。
もしかすると主人を、という考えがあったのかもしれないが。
説明をされた咲夜は、納得したように首を振った。

「ところで十六夜さん。さっきまでの話と全く関係の無いことだけど」

「なにかしら？」

「真神（まなかみ）って、呼びにくくない？　僕の名前を呼ぶ人は皆そう言うのだけれど」

「まあ、少し呼びにくいけれど……」

「ベルでいいよ。単純だし、短いしね」

「そう。許可がもらえるのならそうさせてもらうわね。私のことは咲夜で構わないわよ。さんも付けなくていいし」

「そう。じゃあ、そうさせてもらうよ、咲夜」

なかなかに仲が良いところまで進んだかな？　とベルは思う。
姓でなく名で呼び合うという行為は、それだけで仲を進展させる要因になりえるモノだ。

関係ないことだが、以前、友人に連れて行かれた『メイドカフェ』にいるようなメイドではなくてよかった、と本気で思っている。
あれは鳥肌が立ち、嫌悪感がした。

どう考えても媚を売っているようにしか思えないからだ。
いや、実際そういう店であることは理解しているのだが。どうもアレは耐えられなかった。
彼女のようなメイドで本当に良かった、と心底安心した。
外の世界の情報を教え、代わりとして幻想郷について教えてもらいながら紅魔館へ向かった。

「ここが紅魔館か。紅いね、名前の通り」

普通の妖怪ですら立ち入る事はなく、むしろ避けて通る場所に、二人の人間が立っていた。
妖怪も避ける場所に人間が立っているというのは、少々奇妙な光景である。

「そうよ。で、私はここでメイド長として仕えているの」

「メイド長ねぇ〜。つまり、他にも存在するメイド達の頂点に立ってるんだ。余程の才能の持ち主なんだろうね」

「そこまでたいしたことじゃないわよ」

「いやいや、謙遜する必要性は皆無だよ。咲夜が頂点というのは、紛れも無い事実なのだから」

相変わらず希薄な表情（つまり、真剣な表情に見える表情）だ言われると、流石に恥ずかしいのか、咲夜は眼を逸らした。

――この男は、よくわからない――

「ベルはよくわからない人ね」

「どうだろうね？　綺麗とかカッコイイなんて感想は聞き飽きるほど聞かされたけど、そんな感想は初めて聞いたよ」

「えぇ、よくわからないわ。しいて言えば、普通じゃないってことかしらね」

「普通じゃないって……」

道中で話を聞いていたときから思っていたことだ。
この少年には、他人を思う真っ直ぐな思考がある。透き通るほどに澄んだ心を持っている。
しかし、その中にはしっかりと自分の意思が存在する。
真っ直ぐで透き通る中に、読み取ることがイヤになるほどの、強い意思が。

――お嬢様も、この男に興味を持つかもしれない――

自分は興味を持った。
この短時間で、自分をここまで惹き込んだこの少年に。

「ここまでいいわ。ありがと、ベル」

「どういたしまして」

ベルは荷物を手渡し、ついでとばかりに言う。

「そういえば、この紅魔館には大きな図書館があるんだよね？」

「あるわ。幻想郷一の大図書館がね」

「そうか。……だったら、頼みがあるのだけれど、いいかな？」

「頼み？　なにかしら」

「図書館への入場許可が欲しい。読書が趣味なんだ」

咲夜は首を捻り、思考する。
この少年を善悪で考えると、間違いなく善だ。紅魔館で何かをしでかす、という可能性は限りなく低い。
自分としては問題ないと思うが……。

「わかった。パチュリー様……図書館の管理人みたいな人と、お嬢様に聞いてみるわ」

別にそういった役職に就いているわけではないのだが、事実上の管理人であるパチュリー・ノーレッジ。
自分の主であると共に、紅魔館の主でもあるレミリア・スカーレット。
この両者に聞かなければ、従者である自分ではどうにもできない。
実質、決定権は紅魔館の主であるレミリア・スカーレットにあるから、パチュリー・ノーレッジに聞く必要な無いのだが。
形式上、と言ってものだし、レミリアも彼女の意見を尊重するだろう。

「欲を言えば、一泊させてくれると嬉しい。僕の分の食費は自分で出すし」

「検討してみるわ。結果が出たら人里の誰かに伝言を頼んでおく」

「ありがとう」

礼儀正しく頭を下げるベルをみて、やっぱりよくわからない少年だと思う。

「じゃあ、私はもう戻るわね。手伝ってくれてありがとう」

「うん。またね」

軽く手を振り、踵を返して人里へ向かうベルを見て、なんとなく名残惜しさを感じた。

「お嬢様、ただいま戻りました」

「おかえり、咲夜。ところで、さっきまで誰かと一緒にいた？」

「え、あ、はい。人里から、荷物を運ぶのを手伝ってもらいました」

「ふぅ～ん」

「その人物ですが、図書館への入場許可を求めています。可能であるのならば、一泊させてほしいとも」

「……」

「お嬢様？」

「ねぇ、その人、どんな人物なのかしら？」

「名前は　真神　ベル。ただの人間だと言っていました。違いと言えば外来人といったことでしょうか。善人か悪人かで判断すれば、間違いなく前者かと」

「真神　ベル。ただの人間、ねぇ～……」

「私は許可を出しても問題ないと思うのですが」

「……そうね、許可するわ。宿泊の件も空き部屋を使えば問題ないでしょう」

「承知しました」

「ただの人間、か。私が、運命を視ることさえできなかったというのに？」

人里・紅魔の従者（後書き）

紅魔館フラグゲット！！
此処で魔理沙さんを出すか咲夜さんを出すか、とても悩んだのです。
次で魔理沙さんとアリスさんの魔女コンビに遭遇させようかと思ってます。

誤字脱字報告。感想、アドバイスなどをいただければ幸いです。

魔法の森・恋色魔法使いと七色人形使い（前書き）

更新遅れました。
言い訳させていただくと、入院とか手術とかしてました。ハイ。
「3日の入院で退院できるかも」って言われてたんですけど、
ダメだったんで「手術じゃね、これは」って言われました。
もう治りましたけど。
傷口も塞がったので、あとは傷の完治で終わりです。
ちなみに、病名は「肺気胸」です。

魔法の森・恋色魔法使いと七色人形使い

周りには数十体の妖怪。たぶん、というか絶対に人肉嗜食（カニバリズム）。
でなければ、ギラギラとした興奮気味の眼光で睨まれる理由が無い。
いや、強姦とかもあるだろうが、今回に限ってはありえないだろう。
そんなのこっちから願い下げだ。犯されるのならばせめて相手を人型の妖怪にしてほしい。
熊か豚か判断に困る生物だったり、犬のような体のくせに足はウネウネしたのが十本以上だったり。
それはまだいい。いや、全然よくないのだが、いいとしよう。
で、この眼の前にいるドロドロしたよくわからんものは何だろう？
ヘドロ？　スライム？　いや、なんか時々「ボコッ　ボコッ」と気体を発しているから、きっとバブルスライムの親戚なのだろう。
メタルになってくれれば経験値が稼げる。
そんなバカげたことを考えている間も、「グギャーッ！」だとか「ゴガーッ！」だとか「■☆♪▽★！！」ともはや言語化できない雄叫びとかをあげている妖怪達に囲まれて、
ベルは現実逃避気味に、そして皮肉気に、こう呟いた。

「今日も今日とて平和だね、幻想郷」

時は遡って人里。
いつものように雀の鳴き声で起床し、朝食を食べる。
その後、もはや日課になってしまった子供達との戯れを終わらせ、

寺子屋でお手伝い。
お礼として昼食に、慧音先生の手料理を美味しく頂きました。
妹紅も来たので、談笑をした後、お礼を言って人里をフラフラと巡回。
ついでにご老人のお使いもしていたら、何もすることがなくなった。
ということは、こう呟くのは必然的なものであり……。

「あぁ、暇だ」

ってな訳で、暇潰しはどうするか？　などと悩んでいると、霊夢と紫の『（言葉で）幻想郷ツアー』を思い出した。
その中から比較的人里に近い場所をチョイス。さらに名前からして面白そうな所をチョイス。

「そうだ、魔法の森へ行こう」

希薄な表情で、どこぞのＣＭみたいなことを呟いた。
行き先が決まれば、後は簡単。服装を整え、スペカを持って準備完了。さて、Ｌｅｔ' ｓ　Ｇｏ！

「ふむ、ここが魔法の森だろうか……」

眼の前には森がある。空(うえ)から見ると、かなり広大な森だということがわかった。
場所も聞いたとおりだし、間違い無いだろう。
そう自己完結して魔法の森へと踏み込み、魔法の森の情報を整理する。

魔法の森に人間が近づくことはない。
『普通の人間』にとっては、森の中に生えているキノコ類の鱗粉(りんぷん)がチョッピリ危険だから、ということもあるのだが。
一番大きな理由は至極単純。
妖怪が出るからだ。
『人を襲ってはいけない』という協定が結ばれているのは、あくまでも人里の中での話。
外に出てしまえば、そんな縛りに効力など皆無。
「全ての地で協定を結べば――」と思うかもしれないが、それは無理難題である。
人間が生態系の一部として組み込まれている以上、弱肉強食の世界から逃れる事はできない。
妖怪とて生物だ。食べなければ死んでしまう。
無論、非常に人間に友好的な妖怪も多数存在するのだが……。

そんなことを考えている間にも、自分を睨む視線がジワジワと増加していくのが理解できた。
ベルは表情こそ希薄ではあるが、その容姿容貌はかなり秀でている。
そのおかげで幾度も好奇の視線を受けているため、視線というものに敏感になった。
そんな自分が視線を感じるのだ。まず間違い無いだろう。
しかも、印象の良いものではない。
まるで、そう――ようやく、獲物を見つけた、というような……。

「妖怪、かな？　あまり友好的ではないようだけれど」

自分の知る妖怪（厳密には妖怪でない者も含まれている）は友好的だ。
いや、環境が特殊なだけだろうか。
そのへんのギャップに少し悩んでいると、前からも複数の視線を感じた。

「囲まれた」

ここで、冒頭に戻る。
ベルとしてはこの状況、たいした問題ではない。
そもそもそんな状況にいるという前提すら覆せるのだから、無問題だ。
困っているのは、どうしようかということではなく。
ただ、面倒くさいだけだったりする。

ベルの能力は確かにチートだ。
だが、チートにはチートなりに扱いが難しいところも存在する。
何でもできるという利点と、使い勝手が良いとは言えない欠点。
欠点をもみ消し利点のみを活かそうとすると、結構ダルイ。
さて、どうしよう。こまったこまった、

「もしかして、お困りかしら？」

「うん、困ってる。心を読まれたんじゃないかってくらいジャストタイミングで」

「だったら、助けてやるよ！」

声が二つ、頭上から。
確認するために見上げる直前、頭上から弾幕が降り注いだ。
妖怪の集団が悲鳴を上げる中、ベルは何かに袖を引かれた。

「これは、人形？」

「……（グイグイ）」

人形だから喋れないのか、無言でグイグイと袖を引く。
まるでどこかに連れて行きたいかのように。

「……付いて来い、って言いたいのかな？」

「……（コクコク）」

「わかった。連れて行って」

頷く人形に案内を頼み、導きに従って走る。
うまく誘導してくれているらしく、弾幕にも妖怪にも当たることは

なかった。

「やれやれ、まさか妖怪に囲まれるとはね。災難だったよ」

何故か頭に座っている人形を落さないように注意しながら、ベルは座り込んで木に背を預けた。
避難できて危険が無くなったためか、ふぅ、と息が漏れる。
ドカンッ！　ドカンッ！　ピチューンッ！
あ、誰か落ちたな。
響く弾幕の音に、ポツリと呟く。

「というか君。そこにいると危ないから降りてきなさい」

頭の上からヒョイッと人形を持ち上げ、太股の上に置いた。
ベルを見上げ、「よっ」とでも言うように右手をピッと上げる。
何処を見ても普通の人形だ。別に何か特殊な物がくっついているわけではない。
だというのに、自分で動くのだから驚きだ。さすが幻想郷、意味不明だ。
暇になったので、とりあえず人形の頭を撫でた。

「ホント、普通の人形じゃないね、君」

わかってたことだけどさ。
頭を撫でると、嬉しそうに頭を摺り寄せてくる。
その可愛らしさに癒され、ベルは僅かに頬を緩めた。

「意外と近くに避難してたのね」

名称不明の人形とじゃれあっていると、誰かに声を掛けられた。どこかで聞いたことのある声。
自分を助けてくれた人（？）の声だった。
ふわりとベルの太股から飛び立ち、声の主へ向かう人形を眼で追う。
そこにいたのは、金髪碧眼の美少女だった。
整った容姿とソレっぽい服装が相まって、西洋人形かと思ったほどに。
スッ、と視線を向けられたので、とりあえず礼を言うことにした。

「さっきは助かった。ありがとう」

「気にしないで。私達も、気が向いたから偶々助ける事にしただけだから」

「なんてこった。気が向いてなかったら、僕は既に妖怪達の腹の中にいたかもしれないってこと？」

「そういうこと。だから気にしなくてもいいの。されても困るしね」

困った人は放っておけないお人好し、みたいなよくいる主人公スキルでも持っているのかと思ったのに。
いや、そんな人物が実在していたら偽善者臭くて寒気がするのだが……。

「もう一人は？」

「あっちで残りの妖怪を追い掛け回してる」

「さいですか」

ドンマイ、妖怪達。
まぁ、弱肉強食の世界だ。文句は無いだろう。
……食べられるわけじゃないだろうし。

「あ、戻ってきた」

「ん？」

ヒューンッ！　と風を切る音がする。おそらく飛翔しているのだろう。
しばらくして姿を現したのは

「よっ、アリス。戻ってきたぜ」

魔女だった。
そりゃあもう、驚くほどに魔女だ。
服装とか箒とか。魔女と言われて思い浮かぶ、ほぼイメージ通りの魔女スタイル。
特殊なのは長いウェーブの掛かった金髪と、やはり美少女であるということだ。

「こういう場合は、おかえりって言えばいいのかしらね？」

「普通にお疲れ様でいいと思うけれど」

「あかえりって言われると奥さんがいるみたいだよな」

「いや、そういう感性は理解できない。ごめん」

「貴方って、結構ツッコミ役で固定されてたりする？」

「むしろ、いつの間にかそうなってます」

なんか適当なやりとりを終えた後、こう聞かれた。

「こんな所にいるのもなんだし、うちに来る？」

「是非、お願いします」

ペチャリと、あの人形が頭に張り付いた。

「へぇ～。じゃあ、お前が霊夢とか紫の話題に出てた外来人なのか」

「たぶんね。気に入られてるみたいだし」

「むしろ好かれてる感じがしたけどね」

「いや、実際そうなんだけどね」

魔女っ娘――『普通の魔法使い』霧雨　魔理沙
西洋娘――『七色の人形使い』アリス・マーガトロイド

アリス邸に案内された後、お茶会っぽいことをしながら自己紹介をしてお互いのことを知ることができた。
二人とも霊夢と紫の知り合い（友人）である、というのは、霊夢達の説明で知っていた。
そして、どうやらこの二人はベルのことを、やはり霊夢達から聞いていたらしい。
二人のベルに対する認識はこうだ。

霊夢と紫が惚れている、冷静沈着な男性外来人

合っていると言えば合っている。

むしろ「そのとおりです」としか言えない。
自分が冷静沈着なのは、外の世界から言われていた評価である。
霊夢と紫に好かれているということも、また事実。
否定する要素が一欠けらも無かった。

対して、ベルの二人に対する印象はこうだ。

活発で大雑把な魔理沙
丁寧で礼儀正しいけれど、意外と毒舌なアリス

『対称的な魔女コンビ』と聞いていたが、正にその通りだった。
しかも弾幕まで対称的らしい。

攻め(パワー)の魔理沙
戦術(タクティクス)のアリス

何故こんなにも真逆の性質を持つ二人の仲が良いのか疑問だけれど、
そういえば僕と一番仲が良かった友人も僕と真逆の性質だったから、
そんなもんなのかな。
と長い感想を思い浮かべたベルだった。

「それにしても、珍しいよな。上海がこんなに早く懐くなんて」

「私も驚いた。しかも、あの恥しがり屋の蓬莱まで……」

ベルを助けた人形――上海人形と
道中、アリスの服のポケットからじっとベルを見つめていた人形――蓬莱人形

この二体の人形に、異常なほど懐かれたベル。
何が気に入ったのか、上海はベルの頭にペチャリと張り付き、
蓬莱は上着の内側に潜り込み、やはりベルをじっと見上げている。
とりあえず頭を撫でてやると、恥ずかしげに隠れてしまう姿に癒された。
和んでいるベルに、改めて魔理沙が問いただした。

「で、お前はなんで魔法の森(あんなところ)にいたんだ？」

「ん？　ん～……いまいち質問の意味がわからないのだけれど」

「私が言うのもアレだけどな。魔法の森が『人間』にとって危険なところってことは知ってるんだろ？」

「まぁね。霊夢とか慧音さんとかに聞いたからね」

「だから、なんで魔法の森(あんなところ)にいたのか、疑問だったんだ」

アリスも気になっていた事なのか、視線を感じた。
ベルとしては、「理由なんてない」ということが一番の理由だったりするのだが。
あえて言うのならば、

「暇だったから。知的好奇心があったから。興味があったから。こんなもんかな？」

「そんなものの為に死ぬ可能性がある場所に行ったの？」

「そんなものの為だからこそ、死ぬ可能性がある場所に行ったんだ」
「なぜ？」
「『そんなもの』が満足するほど満たされる場所なんて、どれだけあると思う？」
「……」
「その条件をクリアできるのが、魔法の森だった。つまりは、そういうこと。僕は人間の理（ことわり）に従っただけ。あと願望」

沈黙している二人を相手に、ベルは紅茶を啜る。
いい加減慣れてきたのか、蓬莱はベルに頭を撫でられても隠れなくなった。
むしろ、物欲しそうにベルを見上げてくる。
それに対抗してなのか、上海は頭をペチペチ叩いてくる。
撫でてやると、満足して止める。
……。
人形相手にこんなことをするとは思いませんでした。
というのが、ベルの正直な感想。
そんな感想を抱いているベルを前に、魔理沙とアリスは顔を見合わせ、頷いた。

「やっぱりお前、よくわからないな」
「はい？」

「同感。霊夢達も言ってたけど、よくわからないわね」

「……えっ？　なに？　ちょっと傷付くんだけど」

咲夜にも言われたばかりだし。
というか、霊夢達も言ってたの？　え、なに？　僕ってそんなに変？
ベルはちょっと、いや、かなりショックを受けた。
上海と蓬莱が慰めるようにポンポンと叩いてくるのが、なんか悲しい。

「いい意味で、だけどな」

「いい意味でわからないって、具体的にどんな感じなのさ？」

「こんな感じ」

「……いや、だからわかんねーよ」

指差してくる魔理沙にジト目でツッコム。
プッと噴き出す魔理沙と、クスクス笑うアリス。
いや、まあ、二人が満足してるならいいけどさ。

そんなこんなで

『幻想郷に愛されし者』は

『普通の魔法使い』と『七色の人形使い』

二人の魔女と、二体の人形とお茶会を楽しむのだった

魔法の森・恋色魔法使いと七色人形使い（後書き）

ハイ。
ちょっと急いだので、支離滅裂なところもあるかと。
次は図書館です。
この二人と霊夢さんには会ってもらいますが。

偉人に対する侮辱的な表現がありました。
修正しておきます。

八雲邸・色彩家族（前書き）

更新遅れて御免なさい。
今回は単純に難産でした。
紫さんって、自分の脳内イメージでは「超ミステリアス」さんなので、どう表現すればいいのか迷ってしまって……。
予告では紅魔館でしたが。
「あれ？　紫さんの名前、かなり出てるのに本人が出てない」ってことに気が付いてしまったので、予定変更です。
すみません。

八雲さん家は「幻想郷の端」であることが判明いたしました。
しかし、サブタイトルに「幻想郷の端」と書くのも何か変なので、簡単に「八雲邸」としました。
最初からソレにしとけよ、とか言わないでください。

八雲邸・色彩家族

赤い、紅い。ただひたすらにアカイ世界。
轟々と燃え盛る炎の中で、ポツンと立っている自分。
焼かれて爛れている、ひとヒト他人。火と人。
瞬間、夢だと理解した。いつもの悪夢。
ならば、次に出てくるのはアノ人達だ。
のそりと火の海から出てきたのは、金髪の美男。
――よう、無事か？
――まぁね。一応無傷だよ。なんでだろうね？
――何に愛されてるのか、お前は昔から運が良かったからな。買う度に宝クジ当てるわ景品は一等だわ。
――だからツマラナイんだけどね。
――そんなことより、無事でよかった。息子が怪我しちゃあ、アイツに怒られるからな。
――息子言うな馬鹿兄。
――馬鹿は酷いぜ弟よ。これでも名門校卒の名医だぞ、俺。
死が充満する世界で、呑気に会話をする兄弟。
弟は無傷で、兄は右腕が無かった。弟の視線は、兄の右腕があった場所に固定される。
――ああ、コレか？　どっちにしろ、切断しなけりゃならなかったんでな。引き千切った。
――力尽くで？　止血は？
――火で焼けばそれで止血になる。痛覚も狂ってるから麻酔いらねーし。つーか来いよ。アイツが待ってる。
再び火の海に戻る兄の背を追い、弟も歩を進める。
少し歩いて、停止。眼の前には横たわる美女が一人。
――オイ、連れて来たぞ。
――……無事、だったんですね？

――ん。嬉しいことに、全く傷は無いよ。完璧に無傷。
――そう、ですか。よかった。
ほぅ、と安堵の溜め息をつく。
――義姉さんはどうなの？
――私は、もうだめですね。
――勘違いの可能性は？
――ありません。名医夫婦である私達が言うんですからね。
兄は義姉の隣に座り込み、弟は二人の前に腰を下ろした。
――で、何時間もつの？　名医さん。
――もう逝くぜ。コイツは致命傷だし、俺も無理して歩いただけだしな。
――そうなんだ。
余命宣告。最長、７分。４２０秒。
この三人に残された時間。
ラッキーセブンなんて言葉が、馬鹿馬鹿しく思えた。
――さてと。最期だからな。俺達で礼を言っておこうと思ってな。
――礼？
――ああ、礼だ。
コテンと首を傾げる弟と、真剣な眼で語る兄。
――本当に感謝している。お前のおかげで、俺達の夢は叶った。
――むしろ僕が足を引っ張ってる感じがしたけど。
――そんなことはありませんよ。
肩を竦める弟に呟くのは義姉。
美しい顔を痛みで歪めながら、それでも伝えるために耐える。
――子供が産めない私に、子育てという夢を叶えてくれたのは貴方です。
――１４歳っていう大きな子だけどね。
――それでもよかったんです。愛情を注いで育てて、甘えてくれる子供が欲しかった。
走馬灯でも見ているのだろうか？　幸せそうに、微笑む。

美女の笑顔を、兄弟が見守る。
――ああ、俺はそろそろだな。
――私もです。
――そっか。
兄は、悪いなと言いながら肩を竦める。
義姉は、ごめんなさいと言いながら眼を伏せる。
弟は、別にいいよと言いながら、ただ、見守る。
――手を。
――ん。
義姉の注文に、弟は応えた。
――お願いがあります。
――何？
――私達の後を追うような、馬鹿な真似はしないでください。
ピクリと、体が揺れる。
――ハッ、お前の考えなんてお見通しなんだよ。馬鹿息子。
――二人が逝けば、僕の生存理由がなくなる。あと、息子言うな馬鹿兄。
グリグリと頭を撫でる兄の手を素直に受け入れる。
――いいか、弟よ。お前はこの世界がツマラナイと言ってたな。
――うん。人間として最高のスペックを持って生まれた僕は、何でも出来た。
――そして、運の女神に愛されたお前は、何でも手に入れることができた。
それでも、
――お前は、自分の生存理由を手に入れることが出来ていない。
――貴方が今まで生きてきたのは、ただの惰性。
――そして、俺達が存在したからだ。
それは単なる同情か、この夫婦の為の決意か。弟自身にもわからない。
――だから、今度は貴方自身の為に生きて欲しい。

――誰の為でもなく、お前自身の為に。
無意識に、ただひたすらに夫婦の幸せを願う弟。
意識的に、ただひたすらに弟の幸せを願う夫婦。
この三人だからこそ成し遂げた、三つの歯車の完全な噛み合い。
――その三つの歯車の内、二つが抜け落ちたら、残った一つはどうすればいい？
――回り続けろ。理由が無くてもいい。ただ、廻れ。
――新しい歯車を見つけて下さい。それまで、一人で廻り続けて。
――バカバカしい。無理だね、絶対。
ハッ、と鼻で笑う弟に、兄は言う。
――よく聞け弟よ。俺は、この世に『絶対』という言葉は存在する必要が無いと思っている。
――なぜ？
――よく考えてみろよ。『絶対』ってことは１００％だぜ？　０．００１％の狂いすら許されない。
――……
――０．１％だろうが０．００１％だろうが、狂ってしまえばソレはもはや１００％（ぜったい）なんかじゃねぇ。
――つまり、『絶対』なんてそもそも存在しないってこと？
俺の勝手な偏見で自論だがな、と兄は頷く。
説得にすらなってないよ、と呟く弟に苦笑で返してやった。
――おっと、本格的にヤバイな。体に力入らねぇ。お前はどうだ？
――私も、もう無理ですね。貴方の顔も見えません。
――だそうだ。弟、これで最期の挨拶だな。
――そう、なるね。
初めて聞く弟の悲しげに落ち込んだ声に、夫婦は苦笑した。
――さあ、俺達の言葉を、よく覚えておけよ。
――精一杯生きてください。貴方の為に。
――愛してるぞ、ベル――

――愛してますよ、ベル――

夫婦のそれぞれの左手の薬指に嵌められている結婚指輪（エンゲージ・リング）。
弟はソレを抜き取り、二人の額に口付けを落として立ち去った。

――コレは、僕の約束の指輪（エンゲージ・リング）にするよ――

某月某日、世界中のＶＩＰの卵が集うパーティーで爆発テロが起きた。
参加者　５００名
死亡者　３７２名
重軽傷者　１２７名
無傷　１名

名医夫婦の弟（むすこ）
『神すらも驚愕させる真神（しんのかみ）』

新聞の見出しには、そう書かれてあった。

「……はぁ～～」

溜め息を吐くしかない。
じっとりとした嫌な汗が体を侵す。
嫌悪感や汗から、悪夢を見ていた、ということはわかる。
だが、内容を覚えていない。
過去のことであるのは、なんとなく理解できるのだが……。
そこまで考えて、悪夢に出るような過去なんてアレしかないよな、と苦笑する。
左半身を包み込む柔らかな温もりを意図的に無視しつつ、寝転んだまま部屋を見渡す。
別に言いたいわけでもないし言う理由も無いのだが、ここは世界の理(ことわり)に従っておこうと思う。

「知らない天井だ」

自宅ではないし、博麗神社でもない。
寺子屋で寝る必要性は無いし、アリス邸で寝る可能性もゼロ。
どこだよここ、というのが感想。
いや、この左半身の温もりの原因のおかげで既に答えは出ていたりするけれど。

「いつまで寝たふりしてるつもりかな？」

「気付いてたの？」

「当然。人間としての最高スペックなめないでね」

「あくまでも、『人間として』の最高スペックだから。妖怪である

私としてはあまり意味が無いのよね」

「上級の妖怪だしね。まぁ、そのあたりはどうでもいいとして」

話を区切り、一息入れる。
左半身の温もりの原因へと顔を向けた。

「なんでここにいるのかな、紫さん？」

「あら、好きな人の布団に潜り込んで何が悪いのかしら、ベル君？」

「主に貞操観念的な意味でダメだと思う」

「なら問題無いわね。ベル君になら捧げてもいいと思っているわけだし」

「いや、僕が紫さんに襲われないかどうかって意味なんだけどね」

もちろん、ベルも生物であるが故の性的欲求はある。
しかし、性的興奮を覚えたことはない。
そういう画像だとか本だとかを見せられても無反応だった。
『女性の体はこんなものだ、ということを認識させるだけの研究材料にしかならない』
という言葉は、面白がってベルにそういう本を見せてみた友人を驚愕させた。

「それはおいといて。なんで潜り込んできたのかな？　理由もなく潜り込まないでしょう」

「……なんでそう思うのかしら？」

「君が八雲　紫だからだよ」

そう思うに値する条件だろう？

「……あいかわらず、よくわからない人ね」

「ねぇ、それって僕の二つ名になってたりしない？　最近よく聞く人物評価なんだけど」

「いいえ。貴方の二つ名は『幻想郷に愛されし者』よ。ピッタリでしょう？」

「うん、ピッタリだね。あ、いや、そうじゃなくてね」

「わかってる。潜り込んだ理由でしょう？　でも、自分でも推測できてるんじゃないかしら」

「そうなんだけどね。一応、確認も兼ねて」

そう、わかっている。

アレが原因だ。

「悪夢でも見てたのかしらね？　汗がじっとりしてたわよ」
「見てたね。もっとも、内容は覚えてないよ。予想は出来てるけれど」
「うなされてはなかったけど。苦しそうに、と言うよりは悲しそうにしてたのよ。だから」
「潜り込んだ、と？」
「そういうこと」

人肌（厳密には人ではないが）の温もりを感じさせ、安心させることが目的だった。
というわけか。
起床後、安心して状況を確認できたのは、この温もりのおかげであったりする。
そのことで軽く礼を言うと、

「じゃあ、ご褒美を貰おうかしらね」
「……ご褒美？」
「ええ、ご褒美」

何故だろうか？　嫌な予感しかしない。

いや、ある意味では喜ばしいことなのだろうけれど……。
勝手に潜り込んできてそれは横暴なんじゃないかな？　と呟くベルを尻目に、紫は体を起こしてベルの体に馬乗りになる。
えぇーマジかー、と思いながらもやはり表情は希薄なベル。
紫としては、自分の肉体が女としての魅力が十分あると自覚しているため、何も反応がないベルに少し不満の表情を浮かべる。
それを気にするまでもなく、上半身を伏せてベルの唇と自分のソレを合わせた。
手で顔を挟まれたベルは抵抗もしない。
激しいものではなく、唇の柔らかさや温もりを確かめるような柔らかな口付けを受け入れた。
後頭部辺りを撫でてやると、眼を潤ませて唇をチロチロと舐められた。
内心苦笑しながら唇を開くと舌が侵入してくる。
口内に唾液を塗りたくるように蠢く舌に、自分の舌を絡める。
流し込まれる唾液を嚥下し、逆に流し込む。
ソレを飲み込んだ後、紫はベルの唇から離れた。

「ん……はぁ」

「……挨拶にしては過激だね」

「あいさつ？　まさか。単なる欲望よ」

「うん、まぁ予想できた答えだけど。舌まで入れられたし」

軽く溜め息。
別に、紫との口付けがイヤだったわけではない。

むしろベルは、求められれば応えるタイプの人間だ。
ある条件をクリアすれば、の話であるが。
まぁそんなことはおいといて。
ベルの首筋に顔をこすり付けるようにしている紫に、

「そろそろ起きたほうがいいんじゃないかな？」

「そうね。そろそろ、藍が朝食を完成させてくれているだろうし」

二人で寝室から出て居間に向かうと、二つの姿があった。
姿そのものは成人女性と小学生ほどの少女。
しかし、人とは異なる部分がある。
耳と尻尾だ。
耳は人のソレではなく、それぞれ狐の耳と猫の耳が頭の上に生えている。
そして、尻尾。
驚くべき事に、それぞれ九本の狐の尾と二又の猫の尾を持っている。
つまり、九尾の狐と猫又だった。
ただし、種族的には両者共『妖獣』に属するらしい。

「おはようございます、お二人とも」

「あ、おはよーございます！　紫様！　おに～さん！」

礼儀正しく、ペコリと頭を下げて挨拶するのは九尾の女性。
『すきま妖怪の式』　八雲　藍

元気良く、ベルに飛び付きながら挨拶するのは猫又の少女。
『すきま妖怪の式の式』　橙

そして、ベルの横に立っているスキマ妖怪、彼女らの主人である女性。
『妖怪の賢者』　八雲　紫

つまり、藍は紫の式であり、橙は藍の式である。
藍が八雲の姓を授かっているのに、橙が八雲の姓を授かっていない理由がそこはかとなく気になるベルでした。

「おはよう、橙」

「ん～……」

抱き着く橙の頭を撫でてやると、気持ち良さそうに眼を細めて擦り寄る。
元が猫だからか、仕草がやけに猫っぽい。
耳がピコピコ動くのがやたらと可愛らしかった。

「おはよう、藍さん」

「おはようございます、ベルさん」

歳は藍のほうがかなり上の筈なのに、ベルに対して敬語を使う。
おそらく、紫のお気に入りだからだろうとベルは推測していた。
ちなみに、ベルは誰に対しても敬語は使わない。
（外見的に）年上には敬称を付けるが、それだけだ。

「さて、準備も出来ているみたいだし。食べましょう」

朝食は、白米と焼き魚と味噌汁、そして漬物。
純和風でした。

朝食を食べた後、藍は食器を洗っている。
ベルは猫に変化した橙を膝に乗せて、紫と縁側で日向ぼっこをしていた。

「そういえば、今後の方針とかは考えているの？」

「考えてるよ。紅魔館の図書館に行くつもりなんだ。咲夜にも検討してもらえるように頼んだ」

「ふぅ～ん。怪我は――」

「するつもりはないよ。ソレが『幻想郷』の意思だったら、考えないといけないけど」

隣に寄り添い、尋ねた紫に返答する。
そういえば紅魔館の件はどうなったのだろうか。
あれから三日経っているが、それらしい報告が無い。

「怪我で思い出したわ。ベル君は、戦えるのかしら？」

「ん？　ん～……一応、戦術とか技なら考えてる。ソレが出来るかどうか、試した事はないけど」

「なるほど。まさかとは思うけど、ぶっつけ本番でいく気じゃあ、ないわよね」

「愚問だね。そんな命知らずなことはしないよ。僕も、死にたくはない」

だから、藍さんを貸して欲しい。
彼女ならば自分が考えた戦術や技術を、一分の狂いも無く再現してくれるだろう。
そして、それを御する実力もある。
橙だと、実力的に可能でも精神年齢が低いから失敗する可能性がある。
紫は、そもそもそんなことを自分でやるような者ではない。
だとすれば、必然的に実力があり精神年齢が高く、確実に実行してくれるであろう藍に実験を頼みたかった。

「私はかまわないわよ。あとは、藍本人の了承があれば、お好きにどうぞ」

「それはどうも」

というわけで、縁側にお茶と和菓子を持ってきた藍に交渉してみた。

「――というわけで、君の力を借りたいのだけれど」

「ああ、その程度なら問題ありませんよ。今からやりますか？」

「うん、お願いできるかな」

「わかりました」

コクリと頷くと、藍は縁側から庭に出た。
少し離れて、それでも縁側にいるベルの声は届く位置にいる。

「相手がいないから、戦術とか作戦は確認できない。だから、技術を確認する」

庭に立つ藍と、隣にいる紫、膝の上で「にうにう」と鳴いている橙に説明をする。

「まず僕が考えたのは移動法だ。『高速での移動』『超加速』『急停止』『急激な方向転換』。この四つが使えるだけで、戦術に大きな影響を与える。今から試してもらうのは、超加速だ」

「高機動型の戦闘スタイルをとるというわけですか」

「うん。そもそもこの幻想郷で、僕が力押(パワースタイル)しを選んだとしても意味が無いからね」

当然ではあるが、ベルは死にたくない。
だから、一撃必殺(クリティカルヒット)か一撃離脱(ヒット&アウェイ)が主流になると予想している。
しかし、ここは幻想郷。妖怪だとか神だとかが存在している。
頑丈さが人間とは比べ物にならない妖怪相手に、一撃必殺(クリティカルヒット)を主流にしろ、というのは酷だ。
だからこそ、『超高機動型』を目指しているのだ。
『攻撃』される前に行動し、『防御』させる間もなく潰す。
それが、ベルの理想の戦闘方法だった。

「この技術を思いつくのは意外と簡単だったよ。普段、君達妖怪が使う技を応用しただけだからね」

「私達が使う技で超加速に繋がるモノなんて、あったかしら？」

「アレだよ、妖力の放出。敵を威圧する時とか、体勢を崩す時に使うヤツ」

「アレが超加速になるのですか？」

「理論上では可能なんだ。あとは、実戦で使えるかどうかが問題なのだけれど」

ソレを確かめる為の実験なのだから、まぁそのへんを気にしていても仕方が無い。
早速始めることにした。

「本来、妖力の放出っていうのは自分が纏う妖力を一気に解き放つことだね。ある意味では衝撃波に似てるというか、そのものかな」

イメージ的には、自分を中心とする爆弾という感じだろうか。（爆弾というほど破壊力はないが）
威力や効果範囲などはそれぞれ差異があるが、『自分を中心に放出する』という点では違いはない。

「妖力を拡散的に放出するだけで、アレだけの衝撃がある。だったら――」

――拡散的な『放出』ではなく、一点集中の『噴出』にしたとしたらどうなるか――
――さらに、ソレと移動を組み合わせたとしたら――

「恐らく、いや、確実に、爆発的な推進力を得る事ができるはずだ」

ポツリと言ったベルを、呆れたような、しかしどこか感心したような表情を浮かべる紫と藍が見つめる。

「凄いですね。そんなこと、考えもしませんでした」

「そりゃあそうだろうね。妖怪、特に君達みたいな上位の者になると、こんな技術を考える必要さえない。もともとのスペックだけでもかなり有利な立場に立てる。下手をすれば、技や戦術なんて考えない、思いっきり力（パワー）だけの特攻で勝てるんだもの」

「そうはいってもねぇ～。まさかアレをそんな使い方するなんて、思いもしなかったわ」

紫が苦笑しながら頭を振るのを隣に感じながら、指示を出し始める。

「必要なのは、妖力を一点に集中させること。単純な加速の場合は、背中とか足とかにね」

――この加速法で重要なポイントは主に三つ――

ふわりと空に浮かび上がる藍の足元に、視認できるほどの妖力が集まる。

――ひとつ、妖力の一点集中。体に纏う妖力をまとめ、一点に固定する――

ゆっくりと前傾姿勢をとり、飛翔する心構えをする。

――ひとつ、空気抵抗の減少。なるべく地に水平な体勢をとり、空気、風の抵抗を消滅させる――

「『放出』ではなく『噴出』。その場で『弾けさせたら』ダメだよ。放出の方向性を、一方向に集中させること。でなければ自分が衝撃を貰うことになる」

――ひとつ、従来の『放出』から『噴出』への変換。放出の方向性を、一つの方向に集中させる――

ドゴンッ！！

今までの拡散的なものから一点集中にした妖力の噴出に変換したことにより、過去に例の無いほどの轟音を鳴り響かせる。

藍は自分でも信じられないほどの急加速に成功し、ゆっくりと停止した。

「どうだった？　体に異常とか、無い？」

「あ、大丈夫です。それにしても……」

自分が移動してきた軌跡を見て呟く。

「凄いですね。あんな急加速が出来るなんて、思いませんでした」

「君達は飛翔しているだけだからね。なにか細工を加えようとしているところなんて、見たことないもの」

「細工を加えようなんて思う人のほうが、珍しいのだけれどね」

紫はベルの肩に頭を乗せ、呆れたように溜め息。

しかしベルは、あいかわらず膝に乗って「にうにう」鳴いている橙（猫ｖｅｒ）の頭を撫でながら、当然のように言った。

「僕には必要なことなんだ」

生きるためにね。

力では妖怪に勝つことができず、戦略では戦闘の経験が無いベルが勝てる要素が少ない。

唯一可能性があると予想したのは、技術・技能だった。

自分ができることを徹底的に解読して、応用する。

そして、今までに無い新しい道を抉じ開ける。

それこそが生き残るための一番確実な道であると、ベルは考えたのだ。

「この結果は満足できるものなの？」
「一応ね。まだまだ、改良の余地はありそうだけど。実際の使用者としては、どう思う？」
「そう、ですね……」
主から自分へと移った視線を感じながら、口元の手を当てて考える。ベルとしては、既に一つ考えがあるのだがコレも使えるかどうかわからない。
もし藍が自分と同じ考えを持っているとしたら、ソレこそ『使える』ということが証明される。
何か思いついたらしく、下に向いていた視線をベルに向けた。
「先程は移動に使いましたが、攻撃に使ってみたらどうでしょうか？」
「やっぱり、そうなるよね。あれだけの噴出力だもの。うん、それも試してほしいんだ」
「構いませんが、何を標的に放てばいいのでしょうか……」
「あ、そうだね」
ふむ、と微かに眼を細めて考える。
一番簡単な標的は、その辺りに生えている木だ。
しかし、ベルは縁側から見えるこの景色が気に入っている。

紫や藍もこの景色を好んでいるようだ。
さらに言えば、橙の遊び場になることもある。
まぁ簡潔に言えば、木を標的にしたくはない、ということだ。
もしかしたら吹き飛ぶかもしれないし……。
実際に吹き飛んだところで、どうとでもなるのだが。
つまりは、この景色が破壊される光景を見たくないわけである。
そんなことを考えながら、ベルは藍の傍の空間を見据えた。
ベルが眼を細めると、そこには大きめの岩があった。
……
いつの間にか、初めからソコに存在していたかのように……。
しかし、ベルと紫、藍は驚きもしない。
それが当然であるかのように、平然としていた。

「あいかわらず便利と言うか、凡用性の高い能力よね」

「チートだからね。何でもありなのさ」

「これを標的にすればよいのですね？」

「うん。思いっきりブチかましてもいいよ。片付けは僕がやるから」

その声に従い、藍は右手を上げて岩に向ける。
今度は足元でなく、右手の前に妖力を溜め始めた。

「いきますっ！」

ドゴンッ！

轟音とともに、岩が砕け散る。
調整が不完全だったのか、藍の右腕は跳ね上がっていた。
その際に少し痛めたようで、腕を撫でている。

「破壊力は十分みたいね」

「むしろ破砕力だね。あんなの撃ったら、妖怪でも洒落にならないかも」

「下級の妖怪なら死んでるかもね。中級なら大怪我。上級でも腕一本ぐらい吹き飛ぶんじゃないかしらね」

なんとも物騒な会話をしながら、轟音に驚いた橙（猫ｖｅｒ）を撫でて宥める。
コレも調整が必要か、と考えていると藍が腕を撫でながら戻ってきた。

「痛めた？」

「はい。威力、というよりは衝撃でしょうか？　調整を誤ってしまったようで……」

「しかたがないと思うよ。もともと、出来るか出来ないかっていう段階の不完全な技だったんだし」

ベルが患部に手を当て、軽くなぞる。
すると、今までの痛みが嘘のように消えた。
初めから、痛みなどなかったかのように。
不自然なほど自然に、痛みが退いた。

「ありがとうございます」

「お礼なんていいよ。そもそもの原因は、僕が考えた不完全な技を試験的に実践したからなのだし」

そう言って、隣をポンポンと叩く。
意味がわかったのか、藍はベルの隣に座った。

「ひとまず、『使える』ってことはわかった」

「ですが、実戦で使用するには少々問題がありますね」

「ベル君は人間だからねぇ〜。藍がやって見せたのより、難しいかもよ？」

「かまわないよ。できないなら、できるように変えればいい」

それこそが、僕の選んだ道だ。
紫の髪を梳くように撫で、ボンヤリと考えた。
そう、できないのなら、『変える』だけだ。

「今日は泊まっていきなさい」
「唐突過ぎるうえに命令なんだね」
「決定事項だもの。藍や橙だって、それを望んでいるわ」
藍と橙に眼を向ける。
「わ、私は、その……」
「おに～さん、泊まっていくんですかっ！？」
藍は恥ずかしげに頬を染めて眼を逸らし、橙はベルに抱きついて期待でキラキラ輝く瞳を向けてくる。
ん？　あれ？
この娘、いつ人型になったんだろうか？
気が付けば既に人型だったのですが、そんな高速技能があるんですかそうですか。
「そこまで期待されて断るほど、僕は鬼畜じゃないつもりだよ」
「そうこなくっちゃ」

橙は「やったー！」と両手を上げて喜び、藍は尻尾でベルを包み込む。
紫はベルの右手を取り、擦り寄っていた。
もし彼らの前に画家かいるとしたら、即座に絵を描き始めただろう。
絵面的には美女二人と美少女を侍らせた美青年であるが。
それでも、画家が狂喜するほど絵になっていたのは、間違いなかった。

「ああ、そういえば」
「ん～？　どうしたの？」
「僕は昨日、自分の家で寝ていた筈なのだけれど。なんで八雲家にいるのかな？」
「そんなの、決まってるじゃない」
「おに～さんが寝てる間に、紫様がスキマで連れてきたんだよ～」
「……」
「すみません、ベルさん」
「いや、いいんだけどね。愛してくれているんだし」

「そうよね。愛してるんだから、何でもしてもいいわよね？」

「……完全に人権とか無視してる発言だよね、それ」

「すみません。本当にすみません」

やれやれ……

とりあえず

「今日も今日とて平和だね、幻想郷」

八雲邸・色彩家族（後書き）

僕的には

紫さんは、『いつでもどこでもベタベタなクーデレ（？）』さん
藍さんは、『人前では普通だけれど、二人っきりの時は砂糖吐くくらい甘々』さん
橙さんは、『いつでもベタベタだけれど、想い人ではなく兄に甘えている妹』さん

ってのが固定イメージです。ハイ。

妖力の噴出云々は完全に自論です。
実際にできるのかどうか、僕が一番気になっていたり。

更新遅れた言い訳ってわけじゃないけれど、愚痴。
期末テストの直後に模擬試験は鬼畜だと思うのです。
月曜から木曜まで3教科毎テストやって、金曜が普通授業で土曜に模擬試験。
代休なし。
金曜日にして欲しかったな～。
成績落ちたな～。
とか思ってます。

もう夏休みですけれど……。

紅魔館・『紅』い『魔』が住む『館』（前書き）

ようやく更新。
リアルが忙しいから仕方ないと割り切っているとはいえ。
どうにかならないものか……。

何か、いろんな作品のオリキャラを考えてしまうから困る。
「けいおん！」然り、「リリカルなのは」然り、「禁書目録」「超電磁砲」然り。
最近は「学園黙示録」なんて有名になりましたね。
僕は静香先生が好きです。あのホワホワ感がなんとも言えない。

サブタイトル。
ニュアンス的には
『紅い魔』が住む『館』でも
『魔』が住む『紅い館』でもいいです。
というか、どちらでも通用しますね。

詰め込み過ぎ感が否めないです。
ところどころ支離滅裂だし……。
文才無いな～、ホント。

紅魔館・『紅』い『魔』が住む『館』

トントントンッ

という、テンポの良いリズムで眼が覚める。
少しばかり起床後の微睡みと布団の温もりを楽しんだ後、起き上がった。
着替えを済ませ、音源である台所へ向かう前に窓を開ける。
ソコには毎日(いつも)のように一つの新聞が置いてあった。
『文々。新聞』
幻想郷最速の名を冠する、射命丸　文という烏天狗が発行しているらしい。
この烏天狗、記者魂とでもいうのだろうか？　ネタ探しの意欲が凄まじいそうだ。
ネタの為なら捏造もするとかなんとか。「ならば何故？」という疑問が一つ。

何故、真神　ベルの取材に来ないのか。

自分で言うのもなんだが、『博麗』と『八雲』という幻想郷の重要人物から愛を受けている男というのは、かなり面白いネタになると思う。
何故、捏造にまで手を出すような、（多分）ネタに飢えている記者が自分の取材に来ないのか。不思議でならなかった。
射命丸　文。実は彼女、八雲と博麗と上白沢、さらには藤原という実力者の集団に「真神　ベルにちょっかい出したら潰す」と脅されているのだ。

興味はあるが、危なくて取材なんてできない。とりあえず新聞だけは置いておこう。何かのキッカケになるかも。
コレが彼女の考えだった。
ちなみに、ベルは脅し云々のことを知らない。

新聞を手にとってボンヤリと眺めていると、間に挟まっていたのだろう、ハラリと紅い封筒が落ちた。
しゃがんで拾ってみると、「真神　ベルへ」と書かれている。ベル宛の手紙だ。
封筒を開け、中の紙を取り出す。折り畳まれていたソレを開くと、こう書かれてあった。

『ベルへ

遅くなってごめんなさいね。ちょっと忙しくて。
図書館の件、お嬢様とパチュリー様から許可を貰えたわよ。
本を汚さないことが条件だけど。
宿泊の件も許可が出たわ。
部屋もあるから問題ないそうよ。
あとは、そうね。
お嬢様が貴方に興味を持ってるみたいなの。是非話がしたいって。
じゃあ、また会いましょう。と言っても、今日になるでしょうけど。

P．S．　この手紙、許可証としても使えるから持って来てね。
門番に見せれば入れてくれるわ。

咲夜より』

咲夜からの手紙だ。
許可が出た事に内心狂喜しつつ、丁寧に手紙を折り畳み紅い封筒に戻す。
大事そうにポケットの中に入れて、ようやく音が響く台所へ向かった。

そこで当然の様に料理をしていたのは、『博麗の巫女』である博麗霊夢だった。

「おはよう、霊夢」

「あら、おはよう。起きたのね、気付かなかったわ」

「台所(ここ)と寝室は離れてるから」

霊夢は時々、こうやって通い妻をする。
だからこそベルは驚きを表さなかったし、軽い調子で受け入れた。
もっとも、『ベルが取り乱す事があるのならば見てみたい』というのが、八雲家と霊夢の共通意思なのだが。
とにかく、霊夢が朝食を作ってくれるのはありがたい。
ベルも料理はできる。レベルもかなり高い。しかし、和食では霊夢に勝てないのだ。
基本的に朝食は和食派であるベルにとって、とても喜ばしい事である。もう大歓迎だ。
いつでも入ってこられるように、鍵を渡してある程だ。
ちなみに、鍵は最新の物を自分で取り付けた。

技術力は外の世界より劣る幻想郷で、安全面を危惧して持ってきたのだ。

「さて、完成っと」

「ん、じゃあ持っていこうか」

「そうしましょう」

盆に載せて、料理を運ぶ。これは当然の様にベルが行った。
居間に持って行って料理を並べる。
ベルが座り、その対面に霊夢が座った。こちら側に来たときからの定位置だ。

「いただきます」

「どうぞ、めしあがれ」

律儀に手を合わせ軽く頭を下げるベルに、霊夢は苦笑しながら答えた。
和食には食べる順番まで決められている作法があるらしいが、正直言ってそんなもん知ったこっちゃねー。
まずは味噌汁を啜る。次に、加減の良い塩味の焼き魚を食べる。
ふっくらと炊き上げられた白米を口に含み、一連の動作を眺めていた霊夢に一言。

「うん。おいしい」

「そう。ありがとう」

素っ気無く返答する霊夢だが、安心したようにほっと息を吐くその瞬間を、ベルの瞳は見逃さなかった。
そんなことを霊夢に一切悟らせず、話を切り換える。

「今日、紅魔館から許可が出たって手紙を貰ったのだけれど。行ってもいいよね？」

「別にいいわよ、怪我しないならね。私も付いて行くけど。その前に、買い物、付き合ってくれない？」

「構わないよ。僕もいろいろ補充がしたいからね」

今更だけれど、とベルは悩む。
彼女が家に入って来たことに気付かなかった。
ということは、“誰か”が侵入してきても気が付かないのではないだろうか。
例えば人食いの妖怪。例えば殺人鬼。
これらにカテゴライズされる者達が入ってくる可能性はかなり低いが、０ではない。

ならば、なんらかの対処法を考えなければならない。
熟練した武人は、たとえ睡眠中であろうと気配を感じて起きることが出来るというのは、小説でよく見る話だ。
聞くところによると、この話は捏造ではなく実際に出来る者が多々いるらしい。個人差があるのは当然だが。
ならば武人に鍛えてもらおうか、と考えて頭を振る。
『戦闘』に長けた者達には心当たりがある。霊夢とか紫とか。
しかし、『武』に長けている者には心当たりがないのだ。
そういえば、紅魔館の門番は武の達人らしい。
紫曰く、「弾幕勝負では弱小だけれど、純粋な戦いならば最強の名を冠する一人」。
弟子入りでもしようか……。
そんなことを考えながら、目的の物を求め人里内を歩く。
朝食時に話したとおり、霊夢の買い物に付き合っていた。
もっとも、彼女曰く「買い物なんて『ついで』よ。アナタの朝食を作るのがメインに決まってるでしょ」とのこと。
愛されてるなぁ、と惚気のような思考に浸ったりもする。

「あとは魚ね」

「僕はもういいかな」

「アナタも律儀よね。買わなくても能力でどうとでもできるのに」

「犯罪臭いことを考えるね。別にやっても良いけど、ご近所さんとの交流は大切だよ」

「そういうもの？」

「そういうものだよ」

談笑しながらのんびりと歩き、魚屋に到着した。

「お、いらっしゃい、お二人さん」

「やぁ、店主」

「ベル君と博麗さんか。相変わらず夫婦してんのかい？」

「今朝通い妻されました。で、今日はいい魚、入ってるかな？」

「もちろんさ。ちょっと待ってな」

そう言って奥へ引っ込む。

おそらく、一番活きの良い魚を持ってきてくれるのだろう。

先程の会話で紅くなった顔で霊夢が呟く。

「……奥に行ったわね」

「ん、そうだね」

「ってことは、表に出てない物を取ってくるのよね？」

「そういうことになるね」

「一番良いヤツ？」

「だろうね。表に出してると、どれだけ保護してもちょっとは痛むモノだし。保存してあるのを持ってきてくれるんだろうね」

「……近所付き合いって、大切なのね」

「でしょ？　単に『幻想郷』のおかげかもしれないけど」

なにやら隣で肩を落す霊夢の頭に手を乗せてボンヤリとする。
それだけでは暇なので、ちょっとナデナデしておく。
別に意味は無い。
ただ、丁度いい高さに頭があるから置いただけ。それだけでは暇だから撫でただけ。
ではあるが、好意を抱いている男性に頭を撫でられるのは心地良(うれしい)いらしく、顔を綻ばせている。
正に恋する乙女だ。
ベルはただ霊夢の頭を撫で、霊夢はベルの手の温もりを感じていると、店主が戻ってきた。

「ほい、一番活きの良いやつ持って来たぜ」

「ありがとう。いつも悪いね」

「いいってことよ。ベル君のおかげで里の老人達には活気が湧いてる。俺の娘とも仲良くやってくれてるしな。最近、おにーちゃんおにーちゃんって五月蝿いくらいだな」

ガハハと豪快に笑う店主と、代金と商品を交換。
ちょっぴりオマケしてもらって、手を振って別れた。

「いつもあんな感じなの？」

「いつもあんな感じだよ。僕の何が気に入っているのかは、よくわからないけれど……」

「私はなんとなくわかるわね。たぶん紫も」

「そうかい」

店から離れ、適当な場所で立ち止まる。
この辺でいいだろう。
まぁ、大きな障害物が無い場所ならば何処でもいいのだが。

「さて、そろそろ行くけれど。本当に付いて来るの？」

「当然でしょ？　付いて行かなくてどうするのよ？」

一切の躊躇いを感じさせず、即答してくれた。
神社はいいのだろうか？
そう思うが、自分の能力ならばどうとでもできるので大丈夫かと考え直す。

「そう。じゃあ、行こうか。荷物は僕が持つよ」

「お言葉に甘えて、お願いするわね」

差し出されるベルの手に、買った物を渡す。
そしてフワリと浮き上がり、紅魔館を目指して飛翔した。
ソレを見ていた子供が、隣にいる母の服を引っ張りながら言った。

「おにーちゃんが持ってた荷物、消えちゃった」

ソレに対して、母は笑いながらこう答えた。

「当然よ。ベル君なんだから」

飛翔し続けて、紅魔館の近くにある湖付近で降り立つ。
直接紅魔館の前で降りてもよかったのだが、これはある意味礼儀というやつだ。

「今度はここでピクニックなんていいかもね」

「それ賛成。そのときは私にも声掛けてね。あ、でも一人五月蝿い奴がいるし、どうしようかしら……」

「五月蝿い奴？」

「うん。チルノっていう氷精、つまり氷の妖精なんだけどね……」

そんな会話をしながら歩き、門の前に到着。
相変わらずデカイと思う。
これで『家』と言うのだから、なおさらそう思う。
ソコまで考え、さて門番に手紙を見せて中に入れてもらおうかと思ったのだが、

「門番って、あの人？」

「ええ、そうよ。教えてあげた特徴と一致してるでしょう？」

「うん、してる。してるけどね。門番って、アレでいいの？」

「いいんじゃないかしらね？　アイツ、いつもあんな感じで立ってるわ」

そう言って霊夢が指し示す場所に、一人の女性が立っていた。
長い赤髪で、服の上からでもわかるほどスタイルが良い。
中華風の、わかりやすく言えばチャイナ服のような物　（というかそのもの）　を着ている。

見た目、ソコまで強そうには見えないが。
霊夢と紫が『幻想郷最強の拳士(けんし)』と称するくらいなのだから、門番としては申し分無いだろう。
無いのだろうが、あれは、どうなのだろうか？

「門番なのに、寝てるんだ……」

寝ているのだ、グッスリと。
立ったまま、気持ち良さそうに寝息をたてている。
それはそれで凄技だとは思うのだが、これで門番としてやっていけるのだろうか？

「まぁ、正直門番なんて必要ないくらいここの主は強者だから」

「なら、なんで門番を？」

「さぁ？　侵入者の相手をするのが面倒なんじゃないかしら。あと形式美」

「そうか。形式美か……」

正直門番なんていらないんだけど、とりあえず付けとこ。雑魚の相手面倒だし。あと館(やかた)といえば門番だろ。
的な思惑があったのだろうか？　どうでもいいが。
とにかく、彼女に許可を貰わない限りはこの館の中に入ることができない。

起きてもらわなければ困るのだが、どうにも起きそうにない。
さてどうしようか。

「無視して入っちゃえば？」

「ダメだよ。お願いして招待してもらった側なんだから、その辺の礼儀は守るべきだよ」

「……アナタって、そういう妙なところで律儀よね」

「いや、当然のことだと思うのだけれど。幻想郷の人が自由奔放すぎるんじゃないかな？」

「あ～、それは言えてるわ。自分で言うのもなんだけど、私もそうとうアレだしね」

「自覚していながらありのままでいるのも珍しいね」

「わざわざ変える必要なんてないもの。この幻想郷じゃあね」

まぁ、そのとおりか。
『幻想郷』そのものが意外と自由奔放なのだから、住人がそうでも問題ないだろう。
いや、今はそんな話題ではなくこの門番、“彼女”に起きてもらうことだった。
ということで、呼びかけてみる。

「もしもし、門番さん。起きてもらえると、助かるのだけれど」
「スゥ……スゥ……」
一切反応なし。
気持ち良さそうに眠ったままだ。
何度か繰り返し呼びかけるが、結果は同じだった。
やれやれどうしようかと溜め息をついた時、今まで黙っていた霊夢が動いた。
素敵な笑みを顔に貼り付け、黒い瘴気（オーラ）で身を包みながら“彼女”の横へ移動し、
「えいっ♪」
なんとも可愛らしい掛け声と共に“彼女”を突き飛ばした。
さすがにコレには起きるしかなかったらしく、「ひょわぁ！！」と奇妙な悲鳴をあげながら、さすが武人と言うべき動きで体勢を立て直す。
「な、何するんですかっ！？」
「え？　今なんて？」
「ひぃっ！！」
「ベルが何度も何度も呼びかけてるのに起きるどころか反応すらし

ないなんて。なんなの？　なめてんの？　消すわよ？」

とっても素敵な笑顔でキレている。凄まじい覇気を放出しながら問いかけた。

「消す」って、なんとも物騒な。

“彼女”は頭を抱え、ガクブルと震えている。

起きてもらえたのはいいが、コレでは話が進まない。

とりあえず二人の間にスルリと割り込んで霊夢を宥める。

「まあまあ、霊夢。とりあえず落ち着いて」

「む、ベル。でもコイツ――」

「いいから。ね？」

「……わかったわよ」

「そう。いい子だ」

「ん……」

頭を撫でてあげると擦り寄ってくる。

うん。素直なのはいいことだ。

そんなことより。

それでいいのか、門番？

いまだにガクブル震えている“彼女”を見て、そう思った。というか、思うしかなかった。
しかし、よく考えてみると当然の行動なのかもしれない。
霊夢は『博麗』で、“彼女”は『妖怪』。
ルール無しの手加減無しな戦闘ならば“彼女”が勝つのだろうが、
『博麗』と戦闘するならば弾幕勝負しかない。
それが幻想郷のルールだ。
“彼女”は戦闘は最強格でも、弾幕勝負だと弱小らしい。
弾幕勝負では幻想郷全土で最強と言える実力を持つ霊夢相手ならば、
怯えるのも当然なのだろうか。
つまりまぁ、こういうことだ。

相手が霊夢ならば、しかたない。うん。

こんなことをしている場合ではなかった。
未だに震えている“彼女”だが、とにかく入れてもらおう。

「あー、もしもし？　門番さん」

「ふぇ？」

「うわ、すっごい涙眼」

こういうのを『萌え』と言うのだろうが、正直よくわからないので
この際どうでもいい。
つーかそんなこと興味ない。

「はじめまして、門番さん。んー、っと。名前は？」

「え？　あ、う……紅（ホン）　美鈴（メイリン）です」

服装も中華風だったが名前も中華風だ。
もしかしたらこの女性、もともとは中国か韓国辺りの妖怪なのかもしれない。
紅　美鈴。
紅く美しい鈴。
紅魔館にピッタリな名前だと思う。

「そう。いい名前だ」

「あ、ありがとうございます」

「そんなことよりも紅さん。コレを見て欲しいのだけれど」

紅（ホン）さん、語呂悪いな。
などと考えながら、ポケットから咲夜の手紙を出し、紅い封筒を美鈴に手渡した。

「これは、招待状？　ということは貴方が咲夜さんが言っていた……。あの、失礼ですがお名前は？」

「真神　ベルだよ」

「そうでしたか……。特徴とかは聞いていたのですぐにわかると思っていましたが、霊夢さんの脅しが恐く――」

「ん？　なんか言った？」

「い、いえ！　なにもっ！！」

霊夢の鋭い視線に、慌てて首を横に振る。
弾幕なんてブチ撒けられたらたまったものではない。
瞬殺される。３０秒もしないでピチュる可能性が高い。
それほどまでの実力差があるのだから。

「と、とにかく」

コホン、と咳払いを一つ。

「ようこそ、紅魔館へ。紅魔館住人一同、真神　ベル様の御訪問を歓迎いたします」

腰を曲げ、上流階級の貴族を連想させる丁寧な礼をした。
メイドである咲夜ならばそうでもないが、門番でありチャイナ服を着ている美鈴にそんなことをされるとなんとも奇妙な感覚に襲われる。
美鈴が動いて門を開ける。
漫画なんかでよく見る小さな門があるので、そちらを開けてくれる

のかと思ったが。
なんと、大きい門をそのまま開けてくれた。
それだけ歓迎されているということだろうか？
よくもまあ、あんなに大きい門をあの細腕で開けることができるものだ。
妖怪だから、と言われればそれまでだが。

門を潜り抜けると、咲夜がいた。
最初からずっとここで待っていたのか、何かの知らせを受けて能力で瞬間移動的なことをしたのか。
どちらだろうか？

「いらっしゃいませ、真神　ベル様」

メイド然とした堂々たる雰囲気で一礼する。
しかも４５度の最敬礼で。
メイドならば当然のことなのかもしれないが、そもそもメイドなんてメイド喫茶にいるような者しか知らないのだ。
さっぱりわからない。
わかったところで何かあるわけでもないが。

「お嬢様がお待ちです。部屋までお連れいたしますので、私について来てください」

「ん、了解。でも咲夜、その堅苦しい喋り方。どうにかならないのかな？」

「仕事ですので。これを終えたら、普通に話すことができますが」
「そうかい。だったら、素直について行くことにするよ」
「ありがとうございます」

咲夜に開けられた扉を通り、その後は咲夜の後ろについて歩く。
やはり仕事であるからだろう。人里で手伝った時よりも固い印象を与えてくれる。
あの時の咲夜と比べるとギャップが凄い気がする。
とは言っても、雰囲気そのものは変わっていないので気になることはない。
まぁ、お嬢様に気に入られるかどうかが今後の鍵になる。
そんなことを考えていると、隣を歩いている霊夢に声を掛けられた。

「アナタって、招待されて紅魔館(ここ)に来たのよね？」
「そうなるね。招待状もあったし、歓迎はされているみたいだし」
「そうよね……私がいてもいいのかしら？」
「ん？　んー……大丈夫だと思うけど。もし何か言われたら僕の付き添い、もしくは護衛ってことにしようかな」
「そうしてちょうだい。面倒なことになるのは避けたいし」
入っても何も言われないだろうけれど。

なんせ霊夢は、ここの主に気に入られているらしい。
歓迎されることはあっても、面倒事が起こる可能性は限りなく低い。
国賓待遇でもされるのではないだろうか？
ＶＩＰ待遇。
その単語が頭を掠め、脳裏が『炎』に染められる。
そういえば紅魔館、外装だけでなく内装も紅で染まっている。
ところどころに点在する窓のおかげで『完全な紅』という状況は避けられているが。
窓が無ければ、どうなっていただろうか。

兄夫婦を想い、震えていただろうか？
唇を噛み締め、涙を流していただろうか？
指輪を握り締め、ボンヤリと突っ立っていただろうか？

そんな自問をした結果、自答はこれだった。

無意味。

どうなって“いた”だろう。過去のものとして考えた時点で、この答えは決まっていた。
思考したところで全く意味を成さないものだ。
未来のＩＦは思考する意味がある。対策を練るために。予想するために。
しかし、過去のＩＦは思考したところでどうにもならない。
既に『無限に存在するＩＦの中から選ばれたＩＦ』を体験しているのだから。

「この部屋でお嬢様がお待ちです」

咲夜の声で深い思考の海から出る。
そもそも無意味な思考なのだから、長居する必要性は無かった。
眼の前にはこれまた無駄にデカイ扉がある。

「さて、いよいよ伝説の存在とご対面か。なかなかに興奮してくるね」

「興奮？　してるような表情には見えないけど」

「僕に表情を求めるだけ無意味なのはわかっているよね？　なんせ機械的なんだから」

「希薄って言いなさいよ、自分のことなんだから。というか、自覚はあったのね」

「これだけ明確なものを自覚できないのはおかしいよね？」

そんなのはワザと気が付かないようにしているのか、気味が悪いほど鈍感なのかのどちらかだろう。
ベルはそのどちらでもない。
気が付かないように振舞うほど逃避癖はないし、鈍感とは無縁な程に鋭い。
そんなことは置いといて。

「そろそろ部屋に入りたいと思いますが、よろしいですか？」

「うん。お願いするよ」

「わかりました」

扉の方へ体を向け、ノックをする。

「お嬢様、真神　ベル様をお連れいたしました」

「入りなさい」

なんと形容するべきだろうか。
幼い、しかしどこか威圧ある声。
こういうのをカリスマと言うべきなのかもしれない。
もっとも、カリスマの定義はよくわからないが。

咲夜が扉を開ける。
そこには王座とでも表現すべき椅子があり、それとは不釣合いなほどに小さな影があった。
外見は幼い。小学生と言われても納得できるほどに。
しかし、そんなものは結局、外面でしかない。

その身に纏う雰囲気（オーラ）は恐ろしいほどに強大で。
その綺麗な瞳は恐ろしいほどに紅く。
その肉体は人間を超越したモノ。

「ようこそ、紅魔館へ。歓迎するわ、真神　ベル」

『妖怪』と呼称される種族の中で、頂点に君臨する『吸血鬼』。

『永遠に幼き紅い月』

レミリア・スカーレットが不敵な笑みを浮かべ。

蝙蝠のような翼を広げ、スカートの裾を摘んで一礼した。

紅魔館・『紅』い『魔』が住む『館』（後書き）

人里でのやりとりに大きな意味は無いです。
しいて言えば、前の話の咲夜さん。

「手伝いって、貴方も荷物を……あら？　さっきまであった気が」

発言が勘違いではないっていうのを表現したかったのと。

夫婦と言われる　↓　赤面

がやりたかっただけです。
前者後者共に、薄い内容になってますが。

最近『ベル君チート化計画』がチラホラ思いつきます。
美鈴さんに体術習ったり。
妖夢さんに剣術習ったり。
パチュリーさんに魔法習ったり。
人間の域を超えさせる気はないですが。
人間の限界までは成長させようかな～、とか。

死なないための努力をさせようかな、なんて。
どうしようかな～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3938l/

東方幻夢想

2010年10月17日18時40分発行